

---

# 笛の魔力

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笛の魔力

### 【NZコード】

N1704L

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

少年はモーツアルトのオペラを観てから笛をはじめた。そして成長してあるオーケストラに誘われたが彼が選んだ行く先は。魔笛からヒントを得た作品です。

そのオペラをはじめて見たのはたまたまだつた。本当にたまたまた。テレビでやつているのをちらりと見た。だがそれがはじまりであつた。

「おえおれん」

彼はすぐこ一緒に部屋にいた母に尋ねた。

## この笛を吹して見る

「このテレビの人？」

「うん、その人誰なの？」

母共二つ波一疊四一〇

「タミ  
リ・サペラ」

「う、今晩は次一

一九四〇年二月二日

「ソルジャーのいるのはナーラーのうちは間違

「次々次々リズム らうせん語彙」うの

體を問ひながらおおきな手で

תְּנַשְּׁאָרָה

息子に対して話す。その間ずっと画面を見ている。実は彼女もそのオペラを観ているのである。観ながら我が子に話しているのである。

歌いながらお芝居をね

「何か凄いね」

「アーリー、畠田この人

母はオペラが好きだった。それを窺わせる言葉だった。

「それでこのオペラの名前はね」

「何ていうの？」

「魔笛っていうのよ」

そのタイトルも教えた。ただ息子にわかりやすいように前と表現したのだつた。

「これがこのオペラの名前なのよ」

「魔笛っていうんだ」

「そう、モーツアルトって人が作ったのよ」

「モーツアルトって人が」

「とてもいいでしょ」

また言う母だつた。

「このお芝居も歌も」

「何かとても不思議だね」

芝居の内容や歌、それに音楽を聞いてみての言葉である。実際にそう思つた彼である。

「何でこんなに不思議なんだろう」「うう

「そうね。とても不思議よね」

そのことについては母は答えなかつた。答えられなかつたと言つべきか。何故この魔笛という作品がここまで不思議な雰囲気を醸し出しているかは彼女も口に出して言えなかつたのである。感覚としては何となくわかつっていても言葉として出すのは難しかつたのだ。

「これつて

「不思議だけれどいい音楽」

また言う彼だつた。

「ずっと聴いていたい」

「そう思つのね」

「うん」

また答える男の子だつた。

「ずっといいかな」

「いいわよ」

母は微笑んで我が子のその言葉を受けた。

「若しずつと聴きたいのならね」

「どうすればいいの？」

「笛が上手くなければいいわ」

「やうするといいといつのである。」

「聴きたこのならね」

「笛をなんだ」

「そう、笛をね」

「また言われた。」

「わかつたわね」

「うん、それじゃあ」

これがはじまりだつた。この少年、フリツツはそのまま母の言葉に誘われて笛をはじめたのであつた。しかしこれが思わぬことになつていつた。

笛が上手かつたのである。それも最初からだ。それを聴いた母も学校の友人達も思わず目を瞠つた。我が耳を疑う程であった。

「えつ、嘘」

「こんなに上手いって」

「笛が

皆それを聴いて驚くばかりであつた。ただ上手でいい音色を出すだけではなかつた。その笛の音は流麗でありそしてどんな曲も奏でることができたのである。

そしてそれは学校の先生も聴いた。その先生の感想は。

「君はそのままにしておくのが惜しいかも知れないね」

「いつ言ったのである。」

「もつと笛を勉強するんだ」「この笛ですか」「いや、フルートだ」  
それだというのである。「もつとフルートを勉強するといふ」「フルートを」「そうすれば君はもつとよくなる」  
こう彼に話すのだった。ピアノの前で。「フルートをやれば君は必ず素晴らしい奏者になる」「わかりました」  
それを聞いて頷く彼だった。「それじゃあそのフルートを」「頑張るんだよ」「いや?」「ここで先生は微笑んで彼に告げた。  
「それが君の為になる。いや」「いや?」「その音色が他の人の為にもなる」  
こうも言つのであった。「それがね」「他の人の為にもですか」「そう、なるんだ」  
先生は彼に話した。「だからだ。いいね」「はい、フルートをやります」  
こうして彼はフルートをはじめることになった。そうしてフルートを吹くとであった。家で練習しているとまあの母親が言つのであった。

「フルート、上手いわね」

「そう?」

「上手いわ。あなたもそう思つわよね」

「うん」

父もそうだと云つ。母のその言葉にだ。

「ともね。いいよ」

「そうよね。吹けば吹く程よくなつてゐる」

「そつかな」

そう言われても自分では今一つ実感の沸かない彼だった。自分で  
はそうなのである。

「自分ではそれは」

「他の人が聽けばわかるのよ」

ところが母はいつも言つのである。

「それはね」

「フリツツのフルートははじめて聽いたけれど」

父はそうだった。しかしそれでも云つのであった。

「いいな、確かに」

「そうよね。これは眞面目に練習すれば日本的に凄い」とになるわ  
よ」

「そうだね、なあフリツツ」

父は妻の言葉を受けながら我が子に対し告げるのだった。

「いいかい?」

「うん」

「御前は笛をどんどんやるんだ」

そうしろといふのである。

「いいな、どんどんだ」

「先生と同じ」と云つんだ

「そうなのか。まあそうだつたな」

我が子の言葉を受けて云つ返した。

「誰だつてそう云つた。御前の笛の音を聽いたらな」

「うん、だつたら

「もつと笛を吹くんだ、いいね」

「わかつたよ、お父さん」

父にも言われた。そして母にもである。すると彼の笛の音はさうによくなつてである。彼はその笛の練習をさうに続けた。やがて彼の笛は人だけが聴くのに留まらなかつた。

学校の校庭で吹いているとであつた。

まずは彼の笛を聴きに皆が集まつていた。それで聴いていたがそこにであつた。他やがて猫が來たのであつた。見れば一匹だけではなかつた。

「猫！？」

「猫が来て」

「それに」

猫はフリツツの周りに集まつた。緑の芝生の上に座つて吹いている彼の周りにだ。そして側にある木の上にだ。別の生き物達が來たのである。

「小鳥まで来たし」「嘘みたい」「けれどこれって」「さうよね」「さうよね」「ええ、それよね」「魔笛よね」「本当にね」モーツアルトのそのオペラを彼等も話に出したのである。そのオペラをである。「動物達も集まって」「それでこうして静かに聴くなんて」「凄いよね」「皆驚きを隠せなかつた。しかしそれ以上にである。彼等はせりふの言つのであった。「聴いていたらそれだけで静かになつて」「そうよね、穏やかになつて」「心が安らいで」「落ち着くよね」彼の笛を聴いているとさうなるのだった。落ち着くのである。心は昂ぶらすに落ち着く。彼等はそれを感じて静かな気持ちになつていくのであった。

それは猫達や小鳥達もであった。彼等もまた同じだった。彼の笛は聴いていると誰もが落ち着き平和になれた。それを聴いた母も言つのだつた。

「貴方の笛はね」「うん」「うん」

「人を平和にさせる笛よ」

まさにそれだというのである。

「その心をね」

「僕の笛が」

「もつと吹くのよ」

そしてこうも言つのであった。

「いいわね、もつとね」

「うん、それじゃあ」

「これは考えなかつたわ」

母は少し驚いた顔で述べた。

「まさか。貴方の笛こそがね」

「僕の笛がどうしたの?」

「魔笛だつたのよ」

まさにそれだといつのである。

「それだつたのよ」

「あのオペラの笛だつたの」

「魔笛はね、聴いた相手の心を楽しいものにさせるわね」

「うん」

それがオペラに出て来る魔笛である。この笛の魔力にはモーリツィアルトがフリー・メイソンの思想を入れたという説もある。どちらにしろかなりの魔力がある笛なのは確かだ。

「貴方の笛はそれと同じなのよ」

「あの魔笛と同じで」

「きっとその笛は」

「何か人の役に立てるの」

「ええ、間違いないわ」

確かに声で我が子に告げた。

「だから頑張つてね、笛を」

「うん、わかつたよ」

母にも言われてであった。彼は笛を学び吹き続けた。そして幼

い日も子供の日も続けてそのうえで時間を過ごした。やがて音楽大学にも進んだ。そしてそこでも。

「あれがフリッツ＝スターマンか」

「ああ、そうだな」

「噂以上だな」

皆その笛の声を聞いて唸るのだった。これは彼の笛を聴いたことのある他の者も同じであった。誰もがそう思つたがそれは彼等も同じだったのだ。

「あの笛の音があれば何でもできるな」

「そうだよな、本当に」

「音楽史に名前が残るな」

「ここまで言われるのであつた。音楽大学に入ったその時点でだ。彼はそれだけの技量をもつ身に着けていてそれ以上のものも備えていたのである。

誰もがその将来を渴望していた。そして。

彼を直接見ている教授が言つのであつた。

「君の進路が決まつたぞ」

「進路ですか」

「ウイーンだ」

音楽の都である。今更言つまでもなく。

「ウイーンフィルハーモニーから話が来た」

「そこからですか」

「そうだ、大学を卒業したらすぐに迎えたい」

「いつ言つのである。

「もう言つてきてこる」

「そうなのでですか」

文句なしに世界最高のオーケストラの一つである。ウイーンかベルリンか、長い間そう言われてきている。まさに音楽の都に相応しいオーケストラである。

そこに大学を卒業してすぐに声をかけられたのである。これは途方もないことだ。

だがフリツィは、静かにいつ言つのであった。

「私はです」

「受けけるな、勿論」

「まずは神父になります」

何とここでこんなことを言つのだつた。

「神父になりたいと思つています」

「神父にだと」

「そしてそのうえで世界を回つます」

「そうするといつのである。

「そうしたいと思つてこまく」

「何つー?」

教授はそれを聞いてだ。思わず声をあげた。まずは自分が聞いた言葉が信じられなかつた。何しろあのウイーンからの誘いだからである。

だからこそ。すぐに問い合わせ返した。

「私は聞き間違えたのか？」

「いえ、間違いではありません」

彼ははつきりと答えた。

「私が神父です」

「なるというのか」

「いけませんか」

「神父になることはいい」

それ自体はいいといつのである。

「しかしだ

「しかしですか」

「そうだ。ウイーンだぞ」

彼にこのことを強調する。ウイーンからの誘いだと「う」とをだ。

「ウイーンから誘いを受けているといつのにだ。いいのか

「私は考えていました」

ここで彼は静かに言つのだつた。

「笛を何の為に使うべきかを

「笛をか

「そうです、笛をです」

言わざと知れたフルートである。彼の笛は今はフルートである。

そのフルートの音色はまさに右に並ぶ者がいないと言われるまでになつていたのだ。

その笛である。何の為に使うべきかと今言つのだつた。

「笛を何の為に使うべきか

「ではその答えはか

「まずは神父になります」

また言つのだつた。

「神父になつてをして

「そして？」

「世界を回ります」

そうするところである。

「そうしてです。世界を回つて私の笛を聴いてもらいまよ」

「君の笛を」

「そうします」

彼は言った。

「それこそが私のするべきことです」

「ではウイーンからの誘いは」

「お断りさせて頂きます」

そうするといふのである。

「そうさせてもらいます」

「そうか。決意は固いのだな」

「ウイーンからのお誘いは確かに有利難いことです」

それは否定しなかった。彼にしてもウイーンフィルハーモニーからの誘いがどれだけ光榮なことはわかつっていた。しかしそれでも

なのだ。

「ですが私のするべきことは  
「わかった」

「ここまで聞いてだ。遂に彼も頷くのだった。

「それではだ。君の望むよつとにするとい

「有り難うござります」

「わかった」

こう言つてであった。彼は神父になりそのうえで世界を回つた。まずはソマリアに向かつた。内戦がまだ続いているその国にある。神父として向かいだ。難民となりあてもなく集まつているだけの人々の前に来てだ。その笛を吹くのだった。

その笛の声を聞くとだ。まずは子供達が顔をあげた。そして彼の前に集まり。笛の音を聞くのだった。

「ねえ、この笛つて

「そうだよね」

「聴いているとそれだけで

「楽しくなつてくるよ」

こう言ひながら少しづつ笑顔になつていくのだった。

「ねえ、皆来てよ」

「この人の笛凄いよ」

「物凄いよ」

彼等は口々に同じ子供達を呼ぶ。やがて難民の中の子供達が全て集まつてである、彼のその笛の音を聴いて楽しい顔になつていつた。暫くは笛の声を聴いているだけだった。しかしであつた。

やがてそれでは飽き足らず。彼等はそれぞれ身体を動かし。踊りはじめた。

「楽しいね」

「そうだよね」

「とてもね」

「こう言いながら踊つていぐ。皆楽しく踊りはじめた。

やがて子供達だけでなく大人達もやつて来てである。やはり踊りはじめた。

難民達が楽しく踊りはじめた。それは今までになかったことだ。

フリツツと共に来た神父達はそれを見て。思わず言った。

「これは一体

「スター・マン神父の笛の声を聴いて」

「それで難民の人達が皆踊りはじめるなんて」

「まさにこれは」

「そうです、あれです」

彼等は口々に言つていき。そして。

あの笛のことを話に出すのであつた。

「魔笛だ」

「それだ」

「それに他なりません」

モーツアルトのその笛だとこつのである。あのオペラのだ。

「あの笛そのままです」

「これはまさに」

「ええ、あの魔笛がここに」

「あると。今わかつたのである。

そして次に難民達を見る。その楽しく踊つている姿をだ。

踊つてゐるのは人間達だけではなかつた。空を飛ぶ鳥達も彼の上を舞い痩せた犬達も来て踊つてゐる。まさに魔笛そのものであつた。

「今までこんな笑顔はここには」

「ええ、ありませんでした」

「ましてや踊るといつ」となぞ

「全く」

そうしたこともなかつたのである。沈みきつたそのままだつたのである。

だが今は違っていた。誰もが明るい笑顔で踊っている。まるで別世界にいるようだ。

「スター・マン神父の笛で」

「本当に何もかもが変わりました」

「そうなのだった。彼は全てを変えたのである。

その日から難民達の顔に希望が戻った。これまで何もする気力もなくなり絶望に沈んでいた彼等の目にだ。それが確かに戻ったのである。

彼はソマリアにいる間ずっと笛を吹き続けた。そうして人々に希望をまた見せたのである。

それからもだつた。各国を回り笛を吹き続けた。それにより絶望に打ちひしがれている人々に希望をまた見せていった。

それを続けているうちにだ。やがてマスクミが彼に注目して。取材をしてきた。

マスクミの者達は底意地の悪い笑みを浮かべて。こう彼に問うのであった。

「一体どんな魔法を使つたんですか？」

「あんなことができるなんて」

「貴方は預言者か何かですか？」

彼が人々に希望を与えていたことに嫉妬していたのだ。こうした嫉妬により他者を貶めるのは人として醜い行為だがマスクミのよくやることでもある。

彼等のその下劣な問いに対して。彼はこう静かに答えた。

「私は私です」

まずはこう答えたのである。

「それ以外の何者でもありません」

「おやおや、それはまた」

「御謙遜を」

「いえ、謙遜ではありますん」

彼は返した。あくまで彼として。

「私が笛を吹くことを許されたのは

「何だというのですか？」

「それでは

「神の御意志です」

キリスト教徒、それも神父として相応しい返答だった。

「神が笛の声で人々、そして動物達の心を癒し楽しませて下さる為です」

「では貴方が笛を吹かれるのは」

「神の御意志なのですね」

「そうです」

まさにそれだというのである。

「それ以外の何者でもありません」

「ふむ。 そうなのですか」

「神ですか」

彼等は実はクリスチヤンであった。クリスチヤンとして神の名を聞くとそれで心が動かない筈がなかつた。彼等もまた信仰を持っているからである。

「神が貴方に笛を吹かせていると」

「貴方の才能ではなく」

「はい、 そうです」

まさにその通りだと。フリツツは答えた。

「そして神のこの人々を癒し平和をもたらすという願いの為に「笛を吹かれるのですね」

「これからも」

「そうさせてもらいます。私はそれだけです」

静かに微笑んでの言葉であつた。これこそが彼が笛を吹く理由であつた。マスクの記者達も彼の言葉を聞き深く感じ入つた。当初の意志は消えて。

「わかりました」

「では、 私達はです」

「私達は？」

「貴方のその笛の声、つまり神の御意志をです」

「祝福させてもらいます」

「こう答えたのである。

「確かに」

「そうさせて下さい」

「わかりました」

そして彼も記者達のその言葉を受けた。そうしていつも自分の側に置いてあるそのフルートを手に取つて。静かに吹きはじめたのであつた。

フルートの優しい音色が記者達を包んでいく。それは確かに神の言葉であつた。人々を癒し、平和に導く神の優しい心そのものであつた。

彼はその生涯を笛に捧げた。戦乱や災害、困窮に喘ぐ人達や動物達の前に出てそうして笛を吹き彼等の心を楽しませた。それこそが神の声だと言つて。そうし続けたのである。フリツツ＝スターマンの輝かしい生涯はその笛と共にあつたのである。それは紛れもない事実であつた。

笛の魔力 完

2009・12・29

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1704/>

---

笛の魔力

2010年10月8日15時12分発行